

## 教師力向上支援事業派遣研修報告書

- 1 所属・職・氏名 富山県立富山商業高等学校 教諭 伊藤 景子
- 2 研修期間 令和3年11月16日(火)、12月27日(月) 2日間
- 3 調査研究課題 問題解決型学習(PBL)を取り入れた授業に関する調査研究
- 4 研修機関等 岐阜県立大垣商業高等学校、岐阜県立岐阜商業高等学校(オンライン)
- 5 研修概要

### (1) はじめに

新しい学習指導要領では、主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)の視点からの学習課程の改善が求められ、改訂の方向性として明確にされたことの一つに、「よりよい社会を創るという目標を共有し、社会と連携・協働しながら、未来の作り手となるために必要な資質・能力を育む『社会に開かれた教育課程』の実現を図る」ことが挙げられる。地域社会の担い手として育成するために、社会に対して目を向けて疑問点や問題点を探り、自分の事として目の前の課題に対する解決策を考える学習機会を設定することがこれまで以上に必要とされている。

これを受けて授業で具体的に取り入れられている学習方法に、問題解決型学習(PBL: Problem Based Learning)がある。子どもたちにとって身近な問題や就業の際に直面する問題を発見し、仮説を設定し、解決策の考案・実践を通じて振り返りを行うもので、実社会との関わりを重視した学習方法である。この度、問題解決型学習を取り入れた授業を実践している学校での研修の機会があり、岐阜県内の各学校を訪問し、課題解決能力の育成を目指した授業への改善を行いたいと考えた。

### (2) 大垣商業高等学校、岐阜商業高等学校での研修

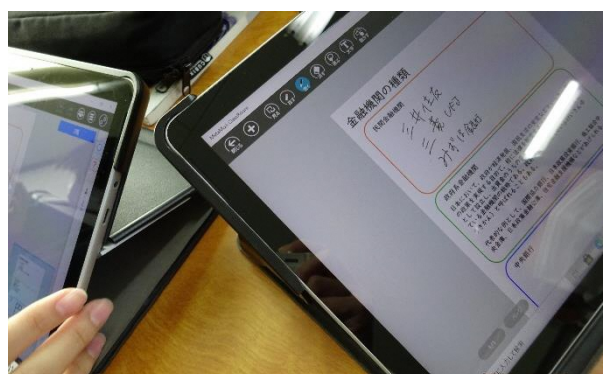
#### ①岐阜県立大垣商業高等学校

主にビジネス基礎、課題研究の授業で問題解決型学習を取り入れた授業を展開しており、1学年のビジネス基礎と3学年の電子商取引の授業を見学した。

#### <ビジネス基礎の授業>

見学した授業では、金融業の学習を行っており前時の学習を元に3~4名のグループで話し合ったり、インターネットで調べたりしながら意見をまとめていた。生徒は全員タブレット端末を使用し、教員から配信されたワークシートに直接入力を行っている。入力した内容は瞬時に全員が閲覧できる状態になり、教員が白板に映し出して意見を共有したり、新たな気付きや問題点を同時に把握したりする教材として即座に利用することが可能なものであった。

岐阜県では、タブレット端末での学習において、リアルタイム授業支援アプリ『MetaMoJi Classroom(メタモジクラスルーム)』を導入しており、教員からの教材配信や生徒からの課題提出を容易に行うことができる。生徒はタブレットをノート代わりに使い、アプリ操作も簡単なものであることから、日常の学習道具として使いこなしている印象を受けた。



日頃の授業で、基本的な用語の意味や企業の取り組みを調べたり、疑問に思ったことを話し合ったりしながら「学び合う機会」を設け、グループでの発表を行い他者の考え方を共有する場を設定できないかと模索していた。本校でも今年度から生徒一人一台のタブレット端末が導入され、教員間でICT機器の効果的な利用方法を話し合い実践しているが、個人的には使いこなせていないのが現状である。学び合いの過程をその場で共有することができるように、生徒にとっても指導する側にとっても分かりやすく使いやすいタブレット端末の活用方法を考えていきたい。

#### <電子商取引の授業>

プログラミングを学習しており、前時の学習を元に隣の生徒と協力して課題に取り組んでいた。科目担当の教員は該当クラスの担任でもあり課題研究の担当者でもあった。課題研究の授業で、第三セクターの地元企業のHP制作に取り組んでいるため、その準備としての基礎知識や技術を学ぶために、電子商取引の授業での演習を利用していた。



見学したのは電子商取引の授業ではあったが、課題研究の授業での取り組みについて知り、それぞれの授業で学んだことを他の授業で実践的に活用することで、科目間の連携が実現できるように工夫されているとの印象を強く受けた。課題研究の授業では、地域・企業・大学との産学官連携を図りながら、社会で今問題となっている事柄がその地域で生活する自分自身の問題でもあるのだとの認識をもたせ、課題解決のために主体的に取り組むことはできないかという「問いかけ」を行うことが根底にある。課題研究の授業は2学年のうちから教育課程に組み込まれ、2学年の3学期には協力企業に対して取り組みの結果を発表することになっており、生徒全員が地域企業や大学との関わりを持つ機会が設定されている。

3学年では学科別に商品開発や企業のHP作成、観光マップの作成などを行い、地域の企業や大学との話し合いや他校も含めた発表の機会を設定し、プレゼン発表の採用や商品化を目指して活動している。企業への提案が採用され、商品化されることが必ず約束されているというのではなく、不採用であればどの点を改善すれば課題解決に繋がるのかさらに検討を進めるなど、実社会で起きうることを想定しての授業を展開しているとのことであった。

課題研究の授業で学ばせたい内容は、地域社会との連携がなければ果たせないものであり、学校教育として学校内で完結させようとするものではない。授業の組み立てを考える立場としては、まずは自らが社会に目を向け生きた教材を探し、積極的に地域の企業・学校・住民との連携を模索する努力を怠らないことが必要であることを痛切に感じた。

## ②岐阜県立岐阜商業高等学校

問題解決型学習（PBL）を取り入れた授業の取り組みについて、岐阜県内の商業科の教員間で教材作成の意見交換を行うオンライン会議に参加することができた。（研修参加校：岐阜商業高等学校3名、土岐商業高等学校1名、益田清風高等学校1名、大垣商業高等学校1名、富山商業高等学校2名）

#### <「コンテンツ作成専門委員会」立ち上げのきっかけ>

岐阜県内では、商業科の若手の教員を中心に「コンテンツ作成専門委員会」での教材作成の交流を進め、年に5～6回の会議を行っている。従来ビジネス基礎などの授業では、資格取得中心の授業であったが、ビジネスの面白さを伝えたり、ICT機器を利用して分かりやすさを追求したりしながら、問題解決型学習を行いたいとの思いから、この委員会を実施している。

### <委員会の活動>

各自作成したコンテンツ（教材）を発表し、議論し、修正点を確認することで、教員の教材作成における「交流」の場としている。コンテンツの内容は、フォーマットが統一されているか、文章は生徒にとって適切か、「探求」できる問いはあるか、評価は適切かなど、共通したチェック項目を置き詳細まで話し合い内容を決定している。会議で修正したコンテンツを次の授業で使用し、生徒の示す興味、反応、学習成果を報告し、更に改善すべき点がないか次回の会議で検討を行う。

修正したコンテンツを他校の教員が使用し、生徒が同じような反応を見せるのか、理解度は異なるのか、さらなる問題点はないかなどを報告し、「検討→実践→修正→再び実践→改善」を繰り返しながら委員会としての活動を行っている。

### <教材作成・授業の方針>

問題解決型学習の授業に生徒が取り組みやすい教材を作成するにあたり、次のような方針がある。

i) プリント1枚で生徒が自分で考え記録できる教材を作成すること

- ・教科書にある基本的な用語を調べさせる
- ・生徒が自分で考えられるような上手な質問を的確に示す
- ・疑問に思ったことやその理由を自分なりに記述・発表できるような、まとめの記入欄を設ける

ii) 実例をもとに題材をつくること

- ・企業の実際の取り組みを題材とする（実際に教材とされていた企業：Amazon、ワークマン、中川政七商店、城北信用金庫、食ベチョク、寺田倉庫、伊藤忠商事）
- ・経済番組などの映像やネットの画像、雑誌、新聞記事を題材として取り入れる（カンブリア宮殿、ガイアの夜明け、東洋経済など）

iii) 「探求」する学習であること

- ・プリントで示す質問は、生徒が自分で考えられるようなヒントを盛り込み、疑問点が思いつくような内容であること
- ・生徒が意見を発表し合い、他者の意見を共有する機会をつくる
- ・意見がまとまらなくても、疑問点に対する明確な答えがなかったとしても、問題点を解決しようと「探求」することができたのならば、授業として成立するものとする（生徒のさまざまな意見はそのまま生かせば良く、無理をして一つにまとめる必要はない）

### <教材を活用して身に付けさせたいこと>

教科書に掲載されている用語や考え方をしっかりと理解させており、基礎知識とビジネスにおける基本的な考え方の習得を大切にしている。また、国内外の企業の実例を考察して、それと比較しながら岐阜県内の企業はどのような活動をしているのかという視点を取り入れるようにしている。地元企業の取り組みや住民が抱える問題等を調べ、そこから考えられる課題を発見し課題を解決するための方法を考える練習をしながら、地域経済の担い手として活躍できる人材を育てたいという思いを感じ取ることができた。

### (3) 感想

問題解決型学習を取り入れる学校は増えつつあるが、これまでにない固定概念を覆すような画期的な授業がどこかに用意されているわけではない。訪問先の学校やオンライン研修で意見を伺った先生方は、先の見えない予測不可能な世の中で、希望をもって社会に出ようとする子どもたちに何とかして新たな学びを授けたい。将来直面する課題に向き合い、考え、発想し、自らの力で他者と協働して課題を解決して人生を歩んでいけるように、そんな子どもたちを育てたいとの確かな思いを持っておられるように感じた。学んだことをすぐに生かすことができる機会は減少しているのかもしれないが、予測できない困難に立ち向かうために、今ある目の前の問題を自分の問題として主体的に捉え、解決する手立てはないか協働して考え実践する授業へ改善できるよう、自己研鑽を積んでいきたい。